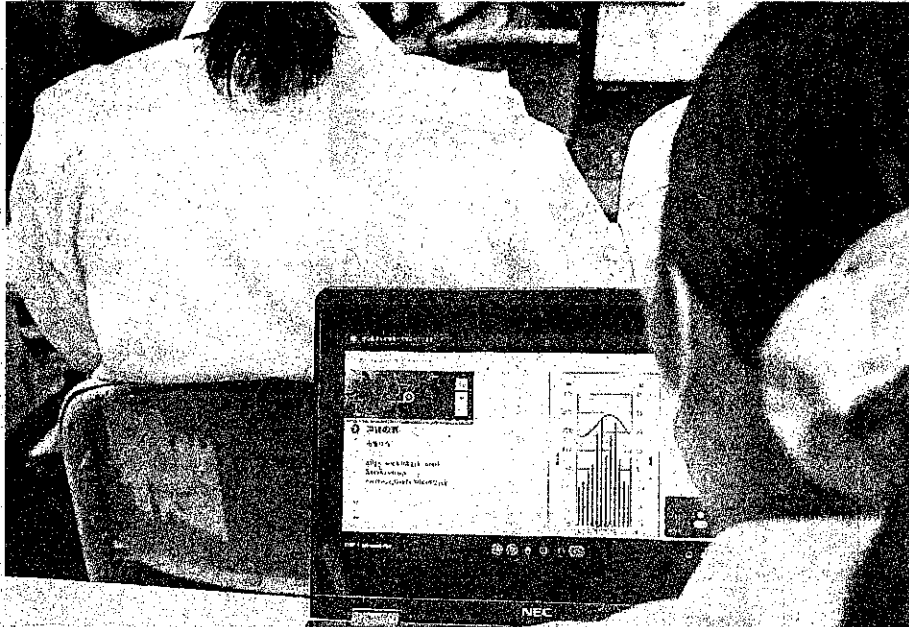


高校地理 奈良大がお助け

今年度から高校で「地理総合」が必修となった。高校で地理の必修化は、1973年に必修から選択科目となって以来、ほぼ半世紀ぶり。地図とデータを重ねて分析する地理情報システム(GIS)といった新しい学習内容もあり、専門外の教員からは戸惑いや不安の声が上がっている。

教授と学生が「出張授業」



タブレット端末で地図と気象データを見る生徒たち―豊中市

地図とデータ 端末画面で分析

高校の「地理歴史科」教員のうち、地理を専門とするのは一般的に2割ほどしかないといわれている。専門外の先生を助けようと、全国の大学でも有数の規模の地理学科がある奈良大学が始めたのが、GISの「出張授業」。GISは学習指導要領で地理総合の柱の一つになっている。

同学科の木村圭司教授と教員志望の学生たちは6日、豊中市の府立桜塚高校を訪れた。1年生6クラスで授業をするためだ。授業のテーマは「世界の

家から気候を考える」。

生徒たちは、タブレット端末で世界各地の住宅の写真を見て特徴を挙げ、その土地の気象データも見ながら、建築と気候の関係について考えた。

GISでは写真や地図、統計などを画面で一覧できるため、資料の整理などに

終始していたかつての授業とは一歩進み、データをどう書いたり社会に生かすかまで考えることができる。先生役を務め、パソコン用の資料も作った奈良大3年の浜田優希さん(18)は、「生徒の見やすさを考えながら、資料を作りました」と話した。

桜塚高校の田上浩指導教諭によると、これから地理の授業を担う若手教員の多くは、学生時代に地理の授業を受けた経験がない。授業のスキル向上はどの学校でも課題という。大学生による授業を見て、「先生も生徒もパソコンの操作にたけているので、適切なタイミングで問いかけができてい」と感心していた。

地理必修化の背景について木村教授に聞くと、2011年の東日本大震災から防災教育が重視されるようになったことや、世界的な環境や難民の問題、SDGs(持続可能な開発目標)などへの関心が高まっていることがあるという。

(漢倉拓也)